

本日、御多用の中、本校第五十五回入学式に御参列賜りました御来賓の皆様、保護者の皆様には心より感謝申し上げます。

## 式辞

厳しい冬の寒さを越え、南寄りの温かな風と柔らかな日差しに、春の訪れを感じる季節となりました。都内各所で薄紅色の桜が咲き誇り、その足元では若い新緑が、次の季節へ向けて静かに勢いを増しています。新入生の皆さん、御入学、誠にありがとうございます。ただいま、三百十六名の入学を許可いたしました。皆さんを東京都立保谷高等学校の新たな仲間として迎えることができましたことを、教職員一同、心より歓迎いたします。また、保護者の皆様におかれましては、お子様の御入学、誠におめでとうございます。これまで大切に育まれてきたお子様をお預かりする重責を胸に、私たちは教育活動に誠心誠意取り組んでまいります。

世の中に たえて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし

平安時代の歌人・在原業平は、春に咲く桜の美しさが私たちの心を明るくする一方で、その花が必ず散ってしまうという、春への喜びと移ろいの切なさを表現しました。——桜の季節は心が落ち着かない、だったら桜がない方がどれほど穏やかに過ごせるのだろうか——逆説的な春への賛美が千年の時を超えて、今を生きる私たちに届けられています。

満開の桜を前に、穏やかな日々がいつまでも続いてほしいと誰もが願いますが、実際の春は、イタリアの作曲家ヴェーヴァルディの「春」に描かれているように、時として激しい雨や風を伴う季節でもあります。桜の花は、穏やかな日差しの中だけで咲くのではなく、ときに冷たい雨風に耐えながら、その役目を終え、やがて散っていきます。私は、この桜の姿と、これから始まる皆さんの高校生活三年間は、よく似ていると感じています。

皆さんはこれから、一人ひとりがかけがえのない存在として、創意工夫を凝らしながら学校生活を送ることになります。しかし、その三年間が、桜満開のような日々だけで続くことはありません。学業や部活動、学校行事において、思うようにいかないことに出会うこともあるでしょう。人間関係に悩み、些細なことでも心をすり減らすこともあるかもしれません。そう考えると、「最初から桜がなければ、すなわ

ち高校に入学しなければ、こうした試練に出会わずに済んだのではないか」と思う瞬間があるかもしれません。しかし皆さんは、自らの意思と希望によって、この保谷高校への入学を選びました。それは、試練から逃げるのではなく、あえて向き合い、自らの力で乗り越え、未来へ飛躍しようとする覚悟の表れであると、私は受け止めています。その一步一步を確かなものとするため、私たち教職員は、さまざま側面から皆さんを支えてまいります。高校生活の主役は、他の誰でもない皆さん自身です。どうか「雨だれ石を穿つ」の覚悟をもって、三年間を歩んでください。

ここで、本校について少しご紹介いたします。本校の教育目標は「知性高く 人間味豊かに 心身ともに健康な人を育成する」です。

「知性高く」は確かな学力、「人間味豊かに」は豊かな人間性、「心身ともに健康な」は健康と体力を指します。すなわち、知・徳・体の三要素をバランスよく育み、高い次元で文武両道を実現しようという願いが、この教育目標には込められています。この目標は、本校のすべての教育活動の根幹を成すものであり、学習活動、学校行事、部活動、委員会活動など、日々の営みはすべてこの目標の実現に向けて行われています。皆さんには、学校のあらゆる活動が、この教育目標に集約されているということ、ぜひ心に留めてほしいと思います。また、昨年度まで「進学指導研究校」として取り組んでまいりました事業は、今年度から「進学指導等の充実事業推進校」と名称を改め、大学一般入試対策に加え、総合型選抜をはじめとする年内入試への対応にも力を注いでまいります。

新入生の皆さんへのエールとして、1990年にアメリカの雑誌ライフが「この1000年で最も重要な功績を残した世界の人物100人」として選んだ一人の女性を紹介します。

ヘレン・ケラーは1880年、アメリカ合衆国アラバマ州に生まれました。生後しばらくは、片言の言葉を話す、明るく活発な子どもでしたが、1歳7か月のときに高熱の病気に罹患、それがきっかけで、視力と聴力を同時に失います。わずか1歳7か月で、光も音も言葉も届かない暗闇の世界に生きることになり、周囲の出来事を理解する術は、触覚だけとなりました。ヘレンは成長するにつれて、周囲の人々が自分とは違う方法で意思を伝え合っていることに気づきます。会話をしている人の間に立ち、唇に触れて動きを感じ取ろうとしますが、それが何を意味するのかは分かりません。ヘレンは、伝えたい思いがあっても伝えられないもどかしさから、次第に癩癩

を起こすようになり、また両親をはじめ周囲の人たちも「かわいそうだから」と何でも与えてしまったため、わがままな性格になっていきます。

その状況を変えるため、家族は20歳の家庭教師サリヴァン先生を迎えます。サリヴァン先生はまず、ヘレンの生活態度を改めることから始めました。食事のマナーを厳しく教え、スプーンの持ち方やナプキンの使い方を根気強く指導しました。暴れて激しく抵抗するヘレンと取っ組み合いになることもありましたが、徐々にヘレンはサリヴァン先生に心を開いていきます。

本格的な教育は、指文字によって始まりました。人形を手渡しながら「Doll」と指に綴る練習を繰り返しましたが、当初ヘレンは、それが物の名前を表す「言葉」であるとは理解できず、単なるジェスチャーとしか認識できませんでした。光と音のないヘレンにとっては、物と言葉の関係性が理解できなかったのです。

サリヴァン先生が来て一か月ほど経ったある日、井戸で顔を洗っていたときのことです。冷たい水に触れた瞬間、サリヴァン先生が「water」と指文字を綴ると、ヘレンはその言葉が、今触れている「水」を表していることを初めて理解しました。これが「ウォーターの奇跡」と呼ばれる出来事です。この瞬間、ヘレンは「物には名前がある」ということに気付き、指文字が自分と世界をつなげる手段であると気付きました。このことを知ったヘレンは、その衝撃からか、しばらくその場に立ちすくんでいたと言われています。続いて大地にひざまずき、地面をたたきながら「これは何か」と尋ね「地面」を理解し、さらにサリヴァン先生に触れて先生の名前を求め、「先生」という概念も理解していきます。そこからヘレンの学びは急加速。名詞や動詞だけでなく、「とても」といった程度を表す言葉や、「考える」といった抽象的な概念も理解するようになっていきます。

ヘレンは、やがて点字を習得し、手紙や文章を書く力を身につけました。一歳で物語を執筆し、さらに学びたいという思いを強くします。一歳からはサリヴァン先生とともに猛勉強を重ね、一歳でケンブリッジ女子校に入学。英語、歴史、フランス語、ドイツ語、ラテン語、古代ギリシア語、数学などを学び、授業では常にサリヴァン先生が教師の言葉を指文字で伝えました。その努力が実を結び、最終的にアメリカ屈指の名門大学、ハーバード大学女子課程ラドクリフ・カレッジに進学、後年は講演活動や執筆、障がい者福祉や教育の重要性を世界に訴え続ける活動を展開しました。声も音も光もない世界から、言葉と知を手に入れたヘレンの生涯は、「学ぶことで世界とつながる」ということを象徴しているといえます。そしてまた、ヘレンが単なるわがままな娘から歴史の偉人として育て上げたのも、サリヴァン先生の献身的な

教育にあることも忘れることはできません。

新入生の皆さん。ヘレン・ケラーは、特別な才能に恵まれていたから偉業を成し遂げたわけではありません。「分らない」「できない」という壁に直面しても、学ぶことをやめなかった、世界とつながる方法をあきらめずに探し続けた、その姿勢こそが、閉ざされた彼女自身を外の世界へとつなげていった要因なのです。冒頭で在原業平の歌を例に挙げたように、試練を避ければ安泰な生活ができるかもしれませんが。しかし入学した以上、皆さんにとって、思うようにいかないこと、理解できないことに必ず遭遇します。その時、その一つ一つを、自己を高めるチャンス、逆境こそ自分を変えるチャンスととらえ、ヘレン・ケラーのように最後まであきらめずに前進し続けてください。本校での学びが、皆さんの世界観を広げる力となることを、心から願っています。

保護者の皆様、お子様の高校での生活は、学業や部活動で心身共に疲労して帰宅することがあるかと思えます。そんな時、お子様にはどうぞ温かなお声かけをしていただき、励ましていただければ幸甚に存じます。子育てで悩みがございましたら、どうぞ御遠慮なく学校に相談くださいませ。最後になりますが、新入生の皆さんが心身ともに健康で充実した学校生活を過ごし、自己実現へと邁進することを切に願います。

令和8年4月7日

東京都立保谷高等学校長

石丸 昌延